

途上国の貧困問題を研究する

高野久紀

私は、途上国の貧困問題をどのようにすれば解決できるかについて、経済学のツールを用いて研究を行っています。途上国の貧困問題の解決についてずっと関心があつたので、大学に入りたての頃は、NGOや青年海外協力隊、国際協力専門員のような、実際に活動する実務の方に関心があつたのですが、いろいろと勉強するうちに、研究者になつてしまいました。本稿では、私が研究者になつた経緯、そして途上国を研究する外国研究者としてどのような意識をもって研究活動を行っているのか、についてお話ししたいと思います。

●研究者を志したきっかけ

途上国の貧困問題については、小学生の頃から関心がありました。ドキュメンタリーで飢餓やストリートチルドレン、難民の話な

どが流されるたびに、なんとか彼らの状況を改善する手助けをしたい、と思っていました。そうした途上国の貧困問題を解決するためには、まずはその国のことを知らなければならぬし、その国の人たちがどのような問題を抱えているか知らなければならぬ、そのためにはまず言葉がわからなければならぬということ、大学時代には東京外国語大学（以下、東京外大）でベトナム語を勉強しました。

しかし、実際に言葉を学んでそれで何ができるようになるかというところ、言葉はあくまでコミュニケーションの手段でしかないのだから、結局自分自身が何か彼らの役に立つスキルなり能力なりをもっていないければ、彼らの問題を解決することはできないと痛感するようになりまし。東京外大では外

交官を目指す人も多かつたので、外交官になつて途上国の内戦や貧困問題を解決できないか、と考えて外交官試験の勉強をしていました。が、試験対策で経済学を勉強するうちに、ある政策を実施するよう相手に妥協や譲歩を求める外交官よりも（相手政府の妥協や譲歩が必要ないような良い政策なら外交官の努力によらずその国自身で実施しているはずです）、経済分析に基づき一国の開発戦略や貧困削減政策を提言していく経済学の方が、途上国政府にとつても経済成長、貧困削減というメリットがあるので受け入れやすいし、現実の政策に対してもっと影響力があるのではないかと考えて、貧困問題に関わる経済学の研究に携わろうになりました。

●研究者への道のり

経済学を研究して途上国の貧困削減に貢献する、という目的意識のもと、経済学の研究者の道を歩み始めたわけですが、研究を通じて貧困問題を解決するというのは、当初考えていたよりもかなり難しいことでした。世の中には、既に貧困問題に関するたくさんの研究があります。そして、そうした研究に基づいて、世界銀行や現地の研究者たちが政府に政策提言を行っています。したがって、自分の研究を通じて貧困問題に貢献するためには、それまでの研究にはなかつた新たな知見を提供しなければなりません。既にある研究に基づいてこういう政策が良いというのとは簡単ですが、自分自身で新たな知を生み出す研究という作業は、単純に勉強していればできるものではなく、まさにひらめきと、そしてそのひらめきを体系的に形にするための膨大な努力が必要な作業でした。貧困問題の解決につながる、これまで誰も考えつかなかつたような独創的・画期的なひらめきなどそう簡単に出てくるはずはなく、東大の経済学研究科の博士課程に在籍しながら、「このまま数学モデルの構築や途上国

の家計調査の分析を行っていて、本当に貧困削減に役立つようなことが出来るのだろうか、援助機関やNGOで実際に援助活動を行ったり、民間企業に勤めて途上国でのプロジェクトを行ったりした方が、貧困削減に役立つのではないか？」と次第に悩み始めました。

そうしたなか、文科省の奨学金で、二年間ベトナムに滞在する機会を得ました。大学時代にベトナム語を専攻してはいましたが、「現場にこそ答えはある」と思っ

て、ワクワクして渡航しました。ベトナムには数回短期で行っただけなので、現場をみて本当に貧困削減に貢献できる研究を始められるチャンスだと思っていました。学部で勉強したベトナム語のレベルでは実際に聞き取り調査などを行うには十分ではなかったので、ベトナム語の授業に通いながら、あれこれ研究テーマについて考えたりしました。しかし、毎日、人々の生活の営みを目のあたりにし、時折聞き取り調査なども行ってみましたが、なかなかこれといったものが浮かびませんでした。貧困削減には教育が大事そう

だとか、雇用が重要だとか、社会の関係も大事だとか、ほかの人が

既に論文に書いている以上のことはなかなか浮かんできませんでした。結局、ベトナム滞在中に仕上げたことといえば、滞在以前に投稿していた論文の改訂を終わらせて二編出版にこぎつけたくらいで、当初の予定だった、本当に貧困削減に貢献できる研究を進めることは、未達成で終わってしまいました。

そんなわけで、ベトナム滞在中はたいした研究の進展もなかったわけですが、実際に現場の経験、調査の経験をしたことで、論文を読む際に、その研究結果がどれほどもつともらしいか、その研究を

発展させるにはどのような調査デザインを組めばいいのか、ということが理解しやすくなりました。そして、帰国後二カ月ほどの間に、当時日本でも少しづつはやり始めていた実験経済学の勉強をし、マイクロレジットに関する経済実験の準備を行い、再度ベトナムに渡航して調査を実施し、論文にまとめて、無事博士号も取得することができました。その後、アジア経済研究所に就職し、様々な研究に携わらせていただき、今年

の春から京都大学に移って研究を続けています。

●ベトナム滞在中で得た教訓

この二年間のベトナム滞在中に、本当に貧困削減に貢献する研究を始めることはできませんでした。今もなお、貧困削減に貢献する研究をすべく奮闘中ですが、この滞在中を通して最も学んだことは、研究へのアプローチの仕方でした。

①現場が全てではない

第一の教訓は、現場だけをずつとみても革新的なアイデアは出てこない、ということ。現場だけみれば解決するなら、その国の人がとくに解決しているはず。現地事情を詳しく調べて論文にしても、現地の人々も現地の研究者もすでに知っていることでは、外国の人々にその国の事情を伝えることにはなれ、現地の政策を改善して貧困層の人々の状況を改善していくことはできません。貧困問題については、現地の知識人や研究者、現地にいる国際機関の研究者たちが、毎日現場をみながら、いろいろ考

えてきたはず。したがって、現場の情報をかき集めて、というやり方だけでは、(よっぽどの天才で、同じ情報を得ても他の人とまったく異なる次元で本質的な見

方ができる、という人を除いては)競争力のある研究はできません。

私の研究が進んだのは、ベトナムから帰国して、様々な新しい論文を読み、新しい視点、新しい分析手法を自分自身にインストールする作業を行ってからです。現場にいる人たちがもっていない分析手法、分析視点を導入することで、その分野の研究コミュニティに、新たな貢献をすることができ

ます。経済学では、ここ数十年で、様々な理論や計量分析手法が発達してきましたが、そうした新たな視点やツールを持ち込んで、これまでの世代ではできなかった研究に挑戦していく、というのがひとつのアプローチです。そのためには、経済学においても、開発経済学だけでなく幅広い分野の最新の研究動向についてこまめにチェックし、また、経済学以外の様々な分野についても知識の継続的なインプットをしていく必要があります。異なる分野の新たな分析枠組み、理論というのは、現地の人々や現地の研究者だけでなく、その研究コミュニティにとっても新しいものですから、うまくいけば、そこから新たな研究分野

を切り開くことができます。

日本には、各分野で優れた日本語の入門書や一般向け書籍があるので、できるだけそういう書籍にも目を通すようにしています。また、日本には、欧米とは独自に発展して主に日本語媒体のみで発表されてきた研究分野も多いので、基礎分析力・数理能力が優れている人は、そうした日本独自の研究から、アイディアのヒントを得ることができるかもしれません。たとえば、開発経済学においては、石川滋先生（参考文献①）や原洋之介先生（参考文献②）は、一九九〇年代の書籍で、「市場の未発達」という概念や資本主義経済の発展における商人の重要性について強調していますが、そうした概念を標準的な経済理論モデルに組み込んで経済発展のプロセスについて研究するなど、日本独自の学問成果を世界標準の分析ツールに載せつつ発展させていく作業も、日本人研究者としての見込みのあるひとつの方向性ではないかと思えます。

② 仮説、クエスチョンから始める

第二の教訓は、第一の教訓とも関連しますが、常に仮説を考えようとする姿勢の重要性です。調査

の段階では、様々な情報が入ってきます。面白いな、と思う情報もたくさん出会うことができます。しかし、いくら現場を駆けずり回って情報をかき集めても、それだけでは、研究にはなりません。情報をひたすら集めて取捨選択して発信するのはマスコミの仕事であって、研究者の仕事は、そうした情報を使って新たな視点を提供し、その視点の正しさを証明することです。そのためには、情報を集めながら、常に仮説を考えようとする姿勢が大切です。情報を集めながら仮説を考えることによって、これからのどんな情報を集めていけばいいのかが明らかになりますし、集める情報の範囲を制限して深く掘り下げていくことで、途上国の研究者も持っていない情報まで到達することができます。

時々、仮説、あるいは明確なリサーチクエスチョンのない研究報告をみかけたりします。もしそこが秘境の地で、他の地域とは制度も風習もまったく異なっていて、その村に住んでいる人以外には現地の人にも知られていないような場所では、その地に関する文化や制度などを事細かに調べて論文として纏め上げることは重要な貢献

だと思えます。しかし、交通網も整備され、情報も簡単に伝達するようになった現代では、そのような場所はごくわずかしか存在しないように思います。したがって、研究動機として、「この国のこの地域はこれまでこの分野の研究が行われてこなかったので研究した」というのが出てきたら、それは危険信号です。そもそも地球上の全ての地域で同一分野の研究を行うことは現実的ではありません。それを踏まえて、なぜその地域でその分野の研究を行うことが、先行研究に対して重要な貢献となるのか、その理由となる理論的枠組みがまずなければいけません。たとえば、先行研究はこのような結果を示しているが、理論的には〇〇が異なる地域ではその結果が逆になる可能性もあるので（あるいは理論Aでは両地域とも同じ結果になるが、理論Bでは両地域で異なる結果になる）、そのような〇〇の性質が異なるこの地域を選んで研究を行った、という思考回路を持つことが重要です。もしそれが正しければ、先行研究で効果があるとされたこの政策を実行すると、別の地域では逆効果になる可能性がある、ということ

が示されるので、政府に政策実施の再考を促すことができます。

③ 十分な準備

これはベトナムでの滞在の体験というよりも、その後の様々な研究プロジェクトの経験からの教訓ですが、準備が非常に重要だということだと思います。現地調査がうまくいかどうかは、その調査の準備段階でほぼ八割くらいは決まっています。現地にいる研究者は、日々情報を集めながら仮説を考え、調査デザインを調整していけばよいわけですが、短期の調査で情報を集めざるを得ない外国研究者の場合は、現地にいく前にどれだけ調査デザインを詰められるかが鍵になってきます。とはいえ、現地に行かないと何が重要な要因なのか分からないことも多いですし、現地で情報を集めるなかで仮説がみえてくることも多いので、できれば本調査の前に、仮説形成のためのブレインストーミング的な現地調査に行ければよいと思います。その間にできるだけ多くの有望そうな仮説をリストアップし、帰国して、若干アイディアを寝かした後に、それぞれの仮説について検討し、そのなかで有望と判断された仮説について、さら

に文献を調べたりして、どのような調査デザインをすればいいかを考えるプロセスが、研究の成功確率を高めてくれると思います。研究トピックは手持ちのデータに制約されるので、自分で調査を行う場合は、まずトピックを確定して、その仮設の検証にどんな情報が必要なのかを様々な角度から検証して情報を集めるようにしないと、(家計調査データや企業調査データなど様々なデータが利用可能になっている現代においては特に)わざわざ自分で調査を実施する意味がありません。

●自分には貢献できているか

研究を始めた頃は、先に述べたように「このまま数学モデルの構築や途上国の家計調査の分析を行っていて、本当に貧困削減に役立つようなことができるのだろうか、援助機関やNGOで実際に援助活動を行ったり、民間企業に勤めて途上国でのプロジェクトを行ったりした方が、貧困削減に役立つのではないか?」と考えていました。しかし、今になって思えば、それは言い訳でした。研究が貧困削減に役立たないのではなく、自分の研究のレベルがそこま

で到達していないので貧困削減に役立たないだけです。たとえば、癌は依然として死に至る病です。仮に私が医学の分野に進んで癌の治療の研究をしたとしても、癌の治療薬を見出せずに、研究をしても癌で苦しむ人々を救えない、医者になって実際に治療に携わっていた方がいい、と思ったことでしよう。しかし、癌の治療は確実に進歩していて、その進歩に大きな貢献をしているのは、わずかな一部の研究者だけです。そうした研究者になれるかどうかは、すべて自分自身にかかっているのです。

また、援助機関やNGOで実際に援助活動をしたり、民間企業で途上国でのプロジェクトを行った方が、本当に貧困削減に貢献できるのかも実際には明らかではありません。計量経済学における政策評価の議論では、必ずといっていいほど「カウンターファクチュアル(反事実的状況)」という言葉がでてきます。これは、ある政策の効果を測る場合には、その政策がなかった場合というカウンターファクチュアルとの比較をしなければいけないという話で、どうそのカウンターファクチュアルを構築するかが、重要な

イシューとなってきました。援助機関やNGOで実際に貧困削減に関わる仕事をしたとしても、自分が貧困削減に貢献しているかどうかは、仮にこの世界に自分がいなかった場合にどうなっていたか、という自分自身のカウンターファクチュアルと比較してみなければいけません。たとえ自分がいなくても、他の人が同じ職種について、まったく同じパフォーマンスをしていたなら、自分自身の貢献は、ゼロということになります。

特に、援助機関やNGOなど、あらかじめ何らかのポストがあったら、それに自分がついている場合には、自分がいなかった場合に採用されたであろう人よりどれだけ優れたパフォーマンスができるかどうか、自分自身の貢献度になります。研究の場合も同じ事がいえますが、オリジナルな研究であればあるほど、自分がいない場合には他の誰もいないので、そのような研究ができるようにオリジナリティのある研究をしたいと思っています。

●おわりに

研究というのは、共同作業です。共同研究だけでなく、同じ研

究分野に携わる研究者全てによる、知の体系を構築する共同作業です。よほどの天才でない限り、一から新たな視点を生み出すことは困難なので、同じ分野を研究している人たちの研究内容から刺激を受けたり、別の研究分野からインスピレーションを受けたりして研究を進めています。途上国においても優秀な研究者が育ち、研究成果を発信していくようになった現在は、この知の体系の構築の共同作業のスピードが進んでいます。最前線にいる者だけがフロントティアを押し進めていけるわけですから、常に自分の分析技術や知識をアップデートして最前線にとどまりつつ、途上国の研究者の現場の知恵と組み合わせながら、貧困削減に向けた知の体系の構築に貢献していけるよう、日々精進していくのみです。

ごとうの ひさき/京都大学)

《参考文献》

- ①石川滋「一九九〇」『開発経済学の基本問題』岩波書店。
- ②原洋之介「一九九六」『アジアダイナミズム―資本主義のネットワークと発展の地域性』NTT出版。